



TITLE:

# 物としての図書から情報としての 図書へ

AUTHOR(S):

北川, 善太郎

---

CITATION:

北川, 善太郎. 物としての図書から情報としての図書へ. 静脩 1978, 15(4): 1-2

ISSUE DATE:

1978-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36818>

RIGHT:



The Kyoto University Library Bulletin

# 静脩

1978年11月

Vol. 15, No. 4

## 物としての図書から情報としての図書へ

法学部教授 北川 善太郎

法学研究の伝統的な手法は、外国の法制について、入手しうる文献を網羅的にあたって歴史的、比較法的、あるいは解釈論的研究を展開するものであった。これは今日でもとりわけ若い法学研究者が意欲的な力作をものにするさいにしばしばみられ、わが法学研究の発展に多くの刺激を与えている。こうした研究にとって、外国で出版された最新のモノグラフィーや論文は、問題の所在をさぐり、ときにはその解答の手掛りをもつかむ上できわめて重要な情報源である。これは一例であるが、ともかく、法学図書を利用する側から見て、研究上便利なモノグラフィーや研究論文等の二次文献の重視が図書館のあり方に影響を及ぼしていることは否定できない。

ところが、こうしたいわば「物」としての図書を収集しておく図書館のあり方は、法学の分野においてつとに行き詰りを見せている。身近なところからその理由をあげると、予算不足、スペース不足、図書の管理体制上の問題等が、図書館のそうしたストック機能をすら不満足なものにしてしまっている。したがって、今後ともこうした機能の充実をはかる努力がなされるべきであるが、行き詰まりの原因として、研究者の側から見てこれ以外の、より重要なものがあるように思われる。一口でいえば、この原因は、法学研究のひろがりによるものといえる。法学研究は、急速に、日本の現実から発生する困難な問題（公害、医療事

故、交通事故、国際取引、消費者保護等）の解決のために動員され、その過程において、内外の一次資料への強い関心、政策論への傾斜、法律情報の比重増大といった図書館のあり方にかかわる動きが表面化してきている。研究にあたり求められる図書が多様化してきたのである。こうした動向から定着して来た一つの流れとして、私は、ストックされた図書を活用するためのツールとなるものへの強い需要をあげたい。これは、いわば「物」としての図書から「情報」としての図書への脱皮につながる流れといてよいであろう。この意味の「情報」としての図書は、いくら「物」としての図書に費用をかけスペースを確保し、図書管理を十分にしても充実されることはないのである。そこには、従来とは質的に異なる図書館機能が期待されているのである。

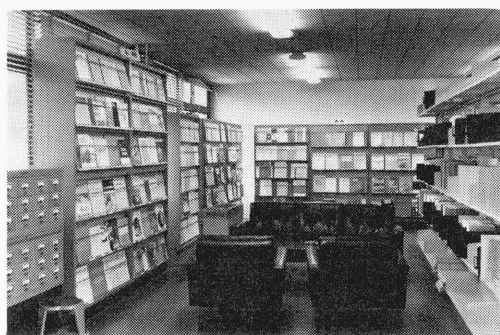
さて、こうした「情報」としての図書をシステム化した図書館機能の充実が法学研究上ますます強く期待されているのであるが、この点でストック機能を中心とした現行の図書館体制と、手仕事の職人気質の研究者の研究体制との間にむしろ大きなギャップが拡大しつつあるように思われる。研究者から見ると、研究対象のひろがりや関連する情報の多様化と情報量の増大のために、自己の研究分野についてさえ、関連する文献をおさえることが困難になっているが、この傾向は、「物」としての図書が充実すれば一層強められるという

皮肉な結果になりかねないのである。そこで、こうしたギャップから生成して来た中間領域を埋める必要があるわけである。これは、二面からなされるべきであろう。その一面は、いうまでもなく、ストック機能に加えて情報機能をもった図書館への脱皮、「物」としての図書を利用し、加工し、これと「情報」としての図書に転換するシステムの作成である。この転換のためのツールとして、たとえば、事項別・著者別等に整理された雑誌論文や判例批判のコンテンツ・サービス、未収図書に関するデータ（どこに収集されているか等）、研究テーマや重要テーマ毎の文献情報の作成等があげられる。そして、こうした文字情報を

さらにマイクロ化し、コンピュータ・システム化して効果的な活用の途をひらくことも考えるべきである。いま一つの面は、研究者が、いわゆる法情報学、コンピュータ法の分野での研究をおし進めることである。コンピュータ利用が一般化するなかで、法学研究面ではなお多くの立ち遅れが見られる。今後は、法学研究においても、「物」としての図書の著作のほかに、「情報」としての図書に関する著作が研究者にとって魅力ある研究成果になるであろう。この点の見通しは必ずしも樂觀を許さないものであるが、それを避けて通ることはもはや出来ないであろう。

## — 図書室めぐり —

### 宇治地区五研究所共通図書室



#### はじめに

宇治地区に、自然科学系の研究所（化研，原研，木研，食研，防研）を集めて総合館が建設され、共通図書室が昭和46年に発足し現在に至っている。

#### 蔵書構成

当図書室では五研究所の逐次刊行物を一ヶ所に集め、部局の壁を越えて各研究所員共有の文献資料として活用されるよう配慮している。その結果化学系の文献は非常に充実し、さらに周辺分野の文献も加わり、化学者にとっての研究活動に極めて効果的な蔵書構成となっている。共通図書室発足当時各研究所間で収書における協力、重複購入外国雑誌の調整を行ったが、利用頻度の比較的高いものは今なお重複購入している。しかし、この

ことは利用者にとって支障なく研究活動を行う上での大きなメリットの一つとなっている。このように宇治地区では研究者が利用する上で最も一般的な情報資料である逐次刊行物に重点をおいた資料収集を行っている。

#### 相互協力活動

現代の研究活動のなかで最も重要なものの一つに文献の入手があげられる。しかし科学技術の急激な発展にともなって発生する膨大な文献を各所にとりそろえることは極めて困難である。そこで文献を合理的、能率的に管理運営し円滑な利用をはかり研究効果を一層高めるために相互協力が必要となる。宇治地区でも本部地区との間では相互協力活動を密にしている。なかでも農学部、薬学部各図書室とは相互貸借に特別な配慮をし、研究者のニーズにに応じている。また、他大学および研究機関との間でも相互協力の制度が確立している。

#### 参考文献紹介

化学の領域は多分野にわたり、情報量も極めて多い。したがって、一次資料へのアプローチの手段として二次資料を網羅的にとりそろえる必要がある。当図書室では主要なものとして下記のものをあげることができる。